

ひとつがみの宝もの



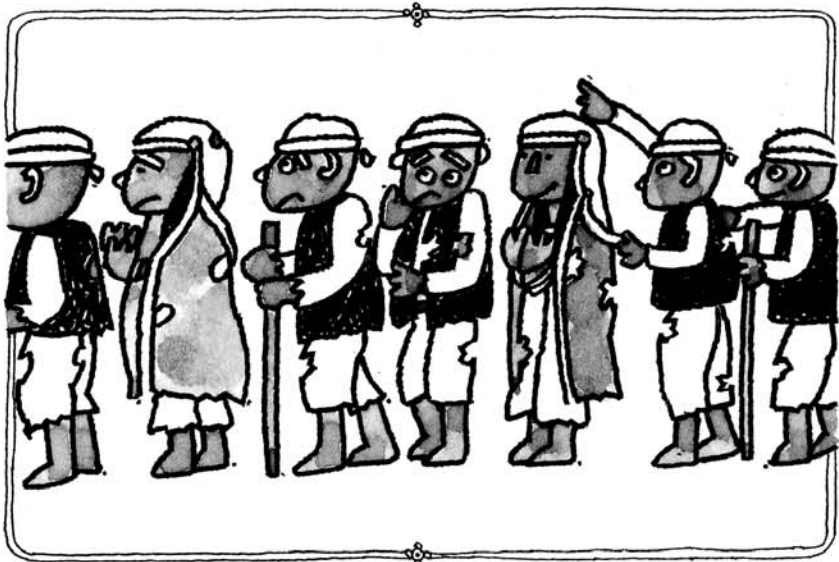
ながいながい行列が、つづいていました。

お城しろの門をでた行列は、お城しろを四重にとりかこみ、そのいちばんうしろは、町のはずれまでつづいていました。

町の人びとは貧ますしく、まいにちのくらしに、つかれはてていました。

お城しろの王まさまは、そんなみんなに、お城しろのなかにある宝たからものを、わけあたえようとお考えになりました。

王まさまは、おふれをおだしになりました。



だれでもひとつかみにかぎり
宝たからものをもちかえてよろしい

大臣だいじんは、王まさまがおだしになったおふれを見て、びっくりしました。

「そんなことをなさっては、いけません。」
「大臣だいじん、そういうが、このお城しろにある宝たからものも、お金も、もとはといえはみんなのものだ。みんなが豊ゆたかなときはよかった。しかし、いまは、みんなが貧ますしく、苦しんでいるではないか。みんなが、すこしでも楽になるよう、集めたこの宝たからものを、ひとつかみずつだが、みんなにかえそうとおもうのだ。」